# 猫又良庵と少年主夫

烏木真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫又良庵と少年主夫

【Ｎコード】
Ｎ３９１７Ｕ

【作者名】
烏木真

【あらすじ】
中学生にして共働きの両親を支える少年主夫と猫又のおじいちゃんのほのぼの生活。
我が道を行く土地神のにーちゃんやヤンデレ陰陽師、ご近所の妖怪のドタバタを全力でスルーしていつもの生活を送ります。
主人公のコンセプトは嫁にしたい男の子だったり
一話完結型？　文芸部で書いているもので、ある程度時間を置いて投稿しています。そのうち冊子に載せてないのも投稿したいなと思ってます。

## 第一話～揚げたての哲学をどうぞ～（前書き）

ジャンル、ファンタジーなのかコメディなのか自分でもよくわからん。これから変えるかもしれないです。

感想待ってます。

## 第一話～揚げたての哲学をどうぞ～

「自炊をするのは偉い。コンビニ弁当には食品添加物の問題などがあるからな。しかし少年よ。昼食にドーナツを揚げるのはいかがなものか」

二股のしっぽを優雅に揺らし、賢い猫は主人を見上げた。彼は主人である啓斗少年の健康を心から心配しているのだ。

「いささか糖分・油分のとりすぎの様だ。おまけに蛋白質も食物繊維も足りないではないか。お母上がいないからと言って少々たるんでいるのではないか？」

長い時を過ごした彼にとって中学一年生の主人はまだまだ心配な子供なのである。

「別にいいだろ。お前が食うんじゃ無いんだからさー。それに母さんが帰って来たってコンビニで甘いもん買って来るだけだろ。変わんないよ」

頬を膨らまし生地を混ぜながら啓斗少年は答えた。ところどころ髪がとび跳ねた、活発そうな少年である。一見料理などしなそうに見えるが、片手で卵を割りいれる手つきはなかなかのものだ。両親共働き、しっかり者の少年はそんじょそこらの主婦などより家事が上手い。

「それにちょうどホットケーキミックスの袋が開いてたから早めに使いきっちゃいたかったんだよ」

結構少年も苦労しているのだ。それを聞いて猫もむうとうなる。猫の目から見ても忙しい両親を思い、家のことを取り仕切る少年はなかなかによくやっている。たまに自分の好きなものを食べるくらいはいいのではないか。

「なるほど。しかしやはり栄養に偏りがある。サラダを一品、無ければジュースか何かで補強することをお勧めする。あと少年。すま

ないが私にも一品何かもらえないか。さすがには揚げ物は食べられない」
「わかった。え～と」
少年は手を止め軽く眉間にしわを寄せた。冷蔵庫の中身を思い出しているらしい。
「確かリンゴジュースとポテトサラダが残ってたから、ちょっと合わないかもだけどそれでいいよね。良庵は魚肉ソーセージと冷凍スープでいい？　最近買い物に行けてないからちょっと冷蔵庫の中が心許ないんだ」
使いかけのホットケーキミックスを引っ張り出してきたのもそのあたりの事情らしい。猫はもちろん快くうなずいた。ちなみにスープは少年が良庵のためにインターネットで検索してきたレシピでかなり手間がかかっている。市販の猫缶を飼ったほうが安いのだが、良庵は少年よりはるかに年がいっているのだ。なるべく体に優しいものをという少年の配慮である。
「ちょっと良庵下がってて、油使うから」
生地を混ぜ終わった少年はボールを持って台所に立つ。やはり油を多く使うのは緊張するようだ。そのあたりを心得た良庵も油を使っているときは話しかけ無い。しばらくの間ドーナツを上げる軽快な音が明るい部屋に流れた。

揚げたてのドーナツのいい香りが小さな部屋いっぱいに広がった。きつね色に焼けた自分の作品を見て少年は満足そうにうなずくと手早く皿に盛り付け、冷凍庫のスープをレンジで解凍した。それを持って台所から居間に移動する。
「良庵はさ。いつも難しいこと考えてて疲れない？」
りんごジュースをマグカップになみなみと注ぎながら少年は猫に問う。

「む、いきなりなんだ？」
浅めの皿に盛られたスープに息を吹きかけていた良庵は首をかしげる。
「良庵はさ。猫なのに栄養のこととか気にしててさ。いっつもなんか考えてるよな。よくそんなに考えることさがせるなと思って。俺は考えたりするの、めんどくさいと思うほうだから」
「むう。主人は考えるのが嫌いか？」
「正直好きじゃない」
「私としては考えるということをそれほど難しく考える必要性は無いと思うぞ？」
髭をひょいと動かして猫は机の上に座りなおした。
「どういう意味？　それ」
「役に立つこと、難しいことを考えようとするから嫌になる。確かにそれも大切だが、考えるということはそれだけではない。一見くだらなそうなことを考えるのは人生を豊かに楽しくする手段だと思うぞ」
「くだらないこと？」
少年の問いに猫は目を細める。
「たとえば…そうだな。少年が食べているドーナツ、穴を残したまま食べることはできるのか。とかな」
啓斗少年は手元を見た。ふっくらとした温かいドーナツがひとつ。
「何それ？　無理だよ」
「いや、案外できるのかもしれないぞ～？」
節をつけて猫が言う。耳をぴくぴくと動かす姿は本当に楽しそうだ。
「適当なこと言わないでよ」
「できないと思うのならその理由をちゃんと言葉にして言ってごらん？」
「ちゃんとって……そりゃ食べちゃったら穴が無くなるわけでええっと……」
分かっていることなのに上手く言葉にすることができない。こんな

単純なことがどうして言葉にできないんだろうと少年は頭を抱える。
「穴の中に何か流し込んで型をとって周りだけ食べるとか」
「ふむ、いい考えだ。しかしそれは穴なのか？　穴とは形のことなのか？」
「あっそっか、今の無し！」
慌てて別の方法を考えようと頭を抱えて少年は唸りだす。
「外側から食べてって穴の周りだけ残すとか……違うな。ドーナツを作るときにくりぬいた穴の部分を揚げて残すとか……これもなんか違う。食べた後にあったことを説明できればいいのかな……どうやって？」
あーでもない、こーでもないとぶつぶつつぶやく少年に猫は呑気に声をかけた。

「少年がさっきの答えでいいと思うならそれでもいいぞ」
「納得できないからいい！」
そういう少年は考えるのに夢中だ。
「ドーナツを食べる時に穴を残そうとすると穴も消えちゃって…消えちゃうのは穴がドーナツの生地で出来てるからで。あれ？　でも生地があるからって穴じゃないよなあ。じゃあそもそも穴って何だ？」
うなりつつ少年は机に突っ伏した。
「うー分かんない！　でもあきらめるのも悔しいよなあ」
「どうだ答えの出ないことを考えるのもなかなか面白いだろう？」
猫はひげをぴくぴくと動かして少年を覗き込んだ。
「おもしろいけどちょっと疲れるよ」
しばらく机に突っ伏していた少年だがむくりと顔を上げた。ドーナツに手を伸ばす。
「丸呑みすればおなかの中に穴が残ってるかな？」
そう言う少年のドーナツを見る目はちょっと据わっている。
「なかなか面白い考えだが少年」

さすがにこれには猫も慌てた。
「くれぐれも実践はしてくれるなよ」

## 第一話～揚げたての哲学をどうぞ～（後書き）

短編のつもりが、文芸部内で案外好評だったので連載に。
友人の一人いわく　嫁にしたい！　そうです。

## ～分け合う人数と食事の喜びは比例する

「ゆーあっまいさーんしゃーい、まーいおんりっさーんしゃーい」
豚肉を炒める音をバックミュージックに菜箸を振りつつ少年が口ずさんだ。彼の名前は穂麦啓斗。中学二年生にして共働きの両親を支える少年主夫である。
「ご機嫌だな。少年よ」
その様子を目を細めて見守るのはしなやかな二股のしっぽをもつ猫である。彼はこのところ機嫌の悪かった少年が元気になったことを喜んでいた。家事いっさいを取り仕切っているとはいえ、まだ中学生である主を、この老猫は大層気遣っているのである。
「よく聞いてくれました！」
人差し指をぴしりと立て―菜箸が猫に当たらないよう先を自分の方に向けるのを忘れずに―啓斗少年は高らかに告げた。
「なんと国産豚肉が六割引き！　と言うわけで今日は肉じゃがね。良庵にも分けたげるから！」
「肉じゃがは食べられないのだが」
「良庵の分は別にして、軽く湯通しするから平気だよ。生じゃ、寄生虫が怖いしね」
この俺に死角はない！　と少年は胸をはる。
「ところで少年。フライパンの面倒はいいのか？」
「わっやばっ！　焦げる焦げる！」
完全に手元がお留守になっていた啓斗少年は慌てる。さらに電話まで鳴り出し悲鳴のような声を上げる。
「ちょっと良庵代わりに出て！」
やれやれ死角はないんじゃなかったのかと呟き良庵は居間へと向かった。

「えー、父さん今日も帰れないの？」
電話は人での少ない地方病院で看護師をしている、少年の父親からだった。久しぶりに早く帰れると言っていたのだが職員の一人が過労で倒れ今日も帰れないらしい。話を聞いた啓斗少年は見るからに不機嫌になった。上機嫌の理由は父親のことだったのかもしれない。
「寂しいのか？　少年」
「ち～が～う」
少年の不機嫌顔は明らかに良庵の言葉を肯定していたが、否定し肉じゃがの皿を指差す。
「作りすぎた」
「なるほど」
忙しい父親は滅多にまともな食事が食べられない、故に啓斗少年は父が帰ってくる日はかなり多めに食事を作るのが恒例になっていた。今少年の母親は長期出張中。肉じゃがを消費するのは啓斗少年一人だ。
「このぶんじゃ明日も肉じゃが明後日も肉じゃが！　あ～あ」
「まあそう言うな少年。本当にかわいそうなのは好物を食べ損ねた父上だ」
「……うん。そうだよね。わかっちゃいるんだけどさぁ」
そう言いながらも恨めしげに皿を見る。余るというのは時に足りないことよりも残酷だ。そこに居るべき人がいないのをより一層際立たせる。
「……まあ、さっきは食べられないと言ったが、私も妖怪だ。食べられないこともないぞ？」
「いい。良庵年なんだから無理しなくていいよ」
溜息を一つつくと少年はタッパーを取り出して肉じゃがを少し取り分ける。
「差し入れる分か？」
「うん、明日病院に持っていこうと思って」
老猫の言葉に少年は気を取り直すように少しだけ微笑んだ。と、同

時に玄関のチャイムが間抜けな音をたてる。
「こんな時間に誰だろ？」
首をかしげつつ少年は玄関に向かった。

「うおお！　トベ！　トベじゃん！　ちょうど良かった。肉じゃが食ってけよ。肉じゃが！　ちなみにキサマに拒否権はない！」
「トベじゃなくてウラベだって何度も言ってるだろ。良庵先生いるか？」
そう答えるのは啓斗少年の同級生である卜部稲城（うらべ　いなき）だ。眼鏡をかけた知的な印象の少年である。
「おや、珍しい。卜部少年ではないか。それと…」
ここで老猫はすっと目を細める。
「ミヅエ様、ですかな？」
「ご明察。さすが先生っすね」
面白がるような声と共に何もない空間に若い男が浮かび上がる。
啓斗少年が驚いて目を丸くすると、青年は目線を啓斗少年に合わせにっこりと笑い
「話をするのは十年ぶりくらいっすかね。啓斗君。椎岳神社の水神、ミヅエヌシっす」

一瞬固まった啓斗少年だったが、考えるのを放棄して二人を家に上げた。山盛りのご飯と大量の肉じゃがをでんとだす。
「俺夕飯食ってきたんだけど」
「ええい、俺の飯が食えんのかキサマ」
「穂麦もしかしてこんな時間に押しかけたこと怒ってる？」
「いや、非常に良いタイミングで来てくれたと思う。
というわけでゴチャゴチャいわずに食え」
「……じゃ、遠慮せずに頂こうかトベ君」
「何あんたまでトベ呼びなんですか、ミヅエ様」

「気にしない気にしない。俺とトベ君の仲じゃないっすか」
しれっとした顔でいけしゃあしゃあと言い切った後、青年はいただきますと手を合わせる。
「気持ち悪いこと言わんでください」
「あ、これうまい」
「聞いてねーしコイツ」
青年のことはまるっきりスルーしていた啓斗少年だったが手料理を褒められて悪い気はしない。
「本当？　お代わりまだあるよ！」
「それはありがたいっすね」
「穂麦、お前なあ。今更だけどいきなりこんな怪しい奴が来て何で突っ込まないんだよ」
「いや、突っ込みどころが多すぎてどこから突っ込めばいいのか……」
啓斗少年はちらっと青年を横目で見やる。だいたい格好からして変だ。なんと形容していいのか啓斗少年には言葉が見当たらない。長い髪を繊細な組紐でくくっているのはまだわかるが、ボタンではなく紐で合わせてある淡い草色の服を帯でまとめた服なんて世界史の教科書でも見たことがない。さらに下に長いプリーツスカートによく似たものと裾を紐でまとめたズボンを履いている。
　良庵に見たことがあるか聞こうと視線を落とすと猫又はぷるぷると震えていた。
「啓斗少年。相手が誰だか分かってるのか？」
「知らない変わったカッコのおにーさん」
「格好？　ああ」
青年は食べるのをやめてめんどくさそうに指を鳴らした。するとあっというまにごく普通のシャツと黒ズボンに変わる。
「ま、こんなもんかな」
ぽかんと口を開ける啓斗少年に得意げな顔をする青年を卜部は軽く睨んでつぶやく。

「最初からその格好でいればいいのに」
「忘れてたんだって、隠形してたし」
「まったく卜部少年までミヅエ様にそんな口を……」
「ああ、いいのいいの、気にしてないし忘れられてるのも予想の範疇っす」
ひらひらと手を振り青年はいかにも興味なさそうに言う。
「そういえば話すのは十年ぶりって」
「落ちたっしょ？　俺の池に」
そう言われて必死に記憶を探る。
「俺の池って、トべん家の神社の？」
「そうそう。毎年初詣に来てるとこ。俺はそれで君のこと知ってたけど」
啓斗少年は完全に思い出した。四歳の時の初詣を。池に落ちて溺れたところを知らないお兄さんに助けてもらい大泣きしたことを。親戚や幼稚園の友達に見られてしばらくというよりここ最近までからかわれ続けた苦い思い出である。
思い出して欝になっているとけらけらとミヅエ様は笑って言った。
「君のお父さんも溺れてたから気にすることないっすよ」
「嘘！」
「ほんとほんと、しかも中三の時に」
「中三！」
少年には想像もつかない話である。身を乗り出したところで良庵から横槍が入った。
「ところでミヅエ様。今日の御用事は」
「あ〜、そうだった。忘れるとこだった。先生明日集会ね。七時から。もちろん夜の」
「それだけでしたらいつものように使いをよこしてくだされば、いいのに」
「議題が議題だから。作業もあったし」
無視されてむくれていた啓斗少年はここぞとばかりに話に割り込む。

「何かあったの？」
すると青年はうってかわって暗い表情になる。
「う～ん。話していいのかなこれ。嫌な話だけど」
「穂麦は知らない方がいいよ、忘れろ」
「だからなんなの」
無視されると思うと少年としては面白くない。
「トベは知ってんでしょ。教えてよ」
「次元にでかい穴が空いちゃって、女の子がひとり連れ去られた」
「ミヅエ様！」
思っていた以上に重い話に少年は一瞬固まる。
「しかも作為的らしくて、日本全国ぼこぼこと空いてるらしいんすよ。で、次元を完全に閉じるか通常通りにしておくか意見をまとめて出雲に提出しなきゃならなくなって……できればさっさと取り返したいんすけど提出しないと許可が降りないんすよ。これだからお役所仕事は……」
うんざりした様子で青年は続ける。
「え、取り返せるの？」
それを聞いて少年はホッとする。
「それなりの儀式を行えばね。難しいけどできないことじゃない。萌木がいればなぁ」
「ああ、トべん家のねーちゃん」
ト部家の長女は優秀な術者で全国を飛び回っていると啓斗少年も聞いたことがある。
「悪かったな、優秀じゃなくて。仮にいても許可が降りなきゃ無理だろ」
「いやいや、トベ君は十分優秀ですヨ～。萌木が規格外なだけで。痕跡なしで異世界につなぐなんて普通無理っしょ」
「て、アンタ許可なしでやるつもりかよ」
「ミヅエ様……」
少年と猫に呆れられても神は動じずに肉じゃがをほおばっている。

「攫われた子まだ小六なんすよ。早く親元に返してやりたいじゃないっすか。許可なんて待ってたら何箇月かかるか……。まあ、今はおとなしく待つしかないんすけど」
言っていることはともかくそういう青年の顔は氏子を守るちゃんとした神様のもので啓斗少年はちょっとだけ見直した。そうだその子はこうして温かいご飯を食べていないのかもしれない。
「そっか、うんじゃあ頑張って、良庵も」
「うむ、嘆願書がきちんとできなければそれも水の泡になるからな。明日は身をいれて挑まねば」
「期待してるっすよ〜。なんたって良庵先生は……」
それからは明るい話題で盛り上がった。口調はおかしいがミヅエノミコトはなかなか話し上手で良庵の若い頃の話や昔の卜部家の逸話、少年たちの両親のなれそめなど、面白おかしく―話の種にされた良庵は多少苦い顔をしたが―話してくれたのだ。少年にとって久々に明るく過ごせた食卓だった。良庵と二人で黙々と食べることの多い啓斗少年にとって人と話しながらの食事は珍しく、何より話の内容は遠い両親と彼とをつないでくれる物だったのだから。
そんなわけでこれから次元の補修に行くという二人が出ていった後も啓斗少年はご機嫌な様子である。タッパーの中以外の肉じゃがは無くなってしまったが、食事のお礼にとミヅエ様が不思議なウロコをくれた上に（貴重なものらしく良庵に大事にとっておくよう何度も念を押された）いつでも遊びにおいでと言ってくれた。妖だけしか参加できない秘密の祭りにも招待されている。
何より、聞いた話を父親に確かめるのが少年は楽しみでしょうがない。

## ～分け合う人数と食事の喜びは比例する（後書き）

余計な設定付け足して訳わかんなくなったんだぜ！
新キャラがべらべら予定にないことまで話し出して焦った。

## ～お母さんほど最強の人種はいない

啓斗少年は最近土地神ミヅエの手伝いをしている。とはいってもなんということはない、ただ噂話やら変わったことや気づいたことがないか、彼に話すだけの簡単な仕事だ。

「やっぱりトベの奴の成績が下がったのが一番騒ぎになってるかなー。たまに授業中寝てたり……騒ぐようなことじゃ無いと思うけど今まで優等生だったからさー。違和感バリバリっていうか」

茶菓子にと出された栗の甘露煮を口に入れながら、横目でちらりとミヅエの顔を見る。クラスメイトの卜部（うらべ）は啓斗少年にとっていい友人だった。しかしここ最近は話しかけても上の空。疲れきった目でぼんやりしていたり、ちょっとしたことで怒ることが多くなった。彼に何があったのか目の前の青年なら知っているのではないかと睨んでいるのだが……相手は涼しい顔で茶をすすっている。

「そう。他には何かないっスか？」

「他には……え～と変なのが一つ。最近異常気象が多いのは妖怪の仕業で、選ばれるとそいつをやっつけるヒーローになれるとかいう、馬鹿丸出しな奴」

「少年意外と毒舌っ」

どうやら土地神様は少年の答えがお気に召したらしい。カラカラとひとしきり笑ったあと、きゅっと目を細めて聞いてきた。

「少年だったらどうする？　ヒーローになりたい？」

口元は笑っているが、目は笑っていない。推し量るような目に緊張してズボンで汗をぬぐった。

「まさか。めんどいし、そんな暇ないもん。少年漫画じゃないんだし、ケガとかしたらどうすんの？　何も特別な力なんてないし、もしもらえるなんて言われても怪しくて。副作用とかありそうじゃん」

「おお、現実的な理由」

「最近流行ったアニメでもそういうので騙されるやつあったし。そ

れに……」
お茶で口を湿らせて、息を吸い込むと思い切って相手の目を睨むように見つめた啓斗少年はゆっくりと言葉を続けた。
「僕が居なくなったら、誰が家のご飯つくるの？」
ミヅエが、正解だよ。というように一瞬だけ満足そうな顔を見せた。
「そういや良庵先生はお元気？　最近お会いしてないんスけど」
「あ、うん。元気元気。たまに調子に乗って人間の食べ物たべちゃうのには困ってるけど。秋で脂肪貯めなきゃなのは分かってんだけど、よそでお刺身とか食べちゃうのはちょっとね。いくら猫又って言ってももういい年なんだからさー、消化に悪いもの食べて欲しくないんだよ。せっかくこっちがカロリー計算しても、勝手にお酒とか飲まれたら意味がないっていうか」
話題をそらされたことにほっとして、べらべらと際限なくしゃべってしまう。口に出したとたん家の様子が気になってきた。良庵お腹すいてないかな。そういえばお米炊いてない。洗濯物取り込んできたっけ。
「じゃあ、これは渡さないほうがいいかなー」
気もそぞろになった少年の様子に気づいたのだろう。ちょっと待っててと言うなり青年は奥に引っ込んでしまった。
「いつも悪いっスね～。はい、お礼」
「ありがとうございまーす。おお！　今日はお酒？」
柔らかい紙に包まれた細長い包みを受け取った啓斗少年は嬉しそうだ。
「まあ、中学生に渡すもんじゃ無いのは知ってるけどね。でもまあ君は隠れて飲むような子じゃないし。……料理に使うんスよね？」
「うん！　嬉しいな～。料理酒でも未成年じゃ売ってもらえないことあるんだよね～。」
何に使おうかな～とつぶやきながら軽くビンを揺らす。いつもはできない本格的な料理が出来ることが素直に嬉しい。

「お肉を煮ようかな。お魚を蒸そうかな。ふっくらして美味しくなるんだよね～。アルコールしっかり飛ばせば良庵も食べられるだろうし」
「日本酒だし鶏とか煮たらどうっスか？」
「それいいかも。楽しみだな～。本当にもらっちゃっていいの？」
「いいのいいの。周りがやたらと送ってくるんスよ。蛟なら皆酒好きって思われてるみたいでさー。どうせもらうなら俺甘いものがいいし」
　ありがとう、もらっていきます。そう言いながらも、報酬をもらって帰ることにほんの少しの後ろめたさを感じてしまい、一瞬躊躇した。
「ミヅエ様さー」
「何スか？」
「俺に仕事頼んだのって、俺がこの件に深入りしてこないって思ったからだよね？」
「……どうしてそう思うんスか？」
　下を向いてしまった少年に
「いやこの前うちに来た時、いきなり変な話題振ってきたでしょ？何か違和感感じてさ。俺がどんな反応するか見てたんじゃない？」
　思い返せばミヅエはあの時も、あからさまでは無いにせよ推し量るような目をしていたように思う。
「それで俺が他人に関心が無さそうだから選んだってことだよね？」
　少なくとも少年には、外に気に入られる要素が自分にあるとは思えなかった。だからこそ気になることがあってもこちらからは聞こうとはしない。
「俺って冷たいのかなって」
　関わらないこと、専門家に任せること。それは正しくて賢い選択なのかもしれないが、冷たくて利己的なものではないか。そもそも本当に助けようとしてくれているのか確かめもせずに信じたフリをして報酬をもらっている。そう思うと自分がひどく情けないもののよ

うな気がしてしまったのだ。
「そうじゃないんスよ」
終始笑顔を浮かべていた土地神は頭を軽く掻きつつ困った表情を浮かべた。
「何つーか、あれだよあれ。うん」
「ボケでも始まったの？」
「そうそう、最近物忘れが激しくて……じゃなくて、自分の手に負えない部分を知ってることと、他人に興味がないのとは違うってこと、ちょっと前に来日してたマザーなんとかさん？　の言葉知らない？　世界平和のために何が出来るか」
「知らない。というかそれって本当に最近？」
啓斗少年は呆れた。何しろこの土地神ときたら、話し方が全く家にいる老猫と同じなのだ。どうせ彼の「ちょっと前」も明治以降のことを指すのだろう。
「そうだ、マザーテレサだ。テレサさん。」
啓斗少年そっちのけでひとしきり首をひねっていた土地神だったが、どうやらやっと思い出したらしい。
「『家にお帰りなさい』」
にっこりと笑って続けた。
「『家へ帰ってあなたの家族を愛しなさい』」
結局一番基本となる家庭を大切にすることが大事をなすのに必要なのだと彼は言う。
「俺から言わせてもらえば、最初っから何でもかんでも手を出そうとする奴は放り出すのも早い。信用ならんね。国造りも最初は兎から、手順も足場も無いうちに何かをしようったってそりゃ無理だって」
真面目な分、トベ君にはこの傾向が強いんスよ、と青年は苦笑した。何もかも自力で何とかしようとして行き詰まりを感じているらしい。
「ぶっちゃけた話。トベ君を助けるのは俺には無理。人間の感性持

ってないし。トベ君にとって俺は非日常の象徴でしかない。あの子に必要なのは変わらない日常を与えてくれる友人だよ。だから君に話したんだ」

「……そうかな」

心配がプレッシャーになりはしないか。不安に思うばかりで悩む友人の力になれなかった。関わらないのは逃げではないか。そういう思いが啓斗少年にはある。

「ちょっとは役に立ててるかな」

あるいはこれから役に立てる日が来るのだろうか。

「役に立つも何も。何も言わずに見守り、それでいて少しでも情報を得ようとこんなところまで乗り込んでくる。トベ君はいい友達を持ったねえ。だいたいあの両親と気難しい良庵先生のいる家庭を支えてるんだから、対人スキルは俺なんかよりずっと高いよ。啓斗少年はもっと自信持っていいのに」

「ミヅエ様」

「何スか？」

なんとなく救われたような気持ちがするのだけど、ありがとう、そういうのも変な気がして。でもなんと言っていいかわからない。口からこぼれたのは自分でも呆れるような一言だった。

「……この甘露煮美味しい。もらってっていい？」

結局お土産に酒と甘露煮の両方をもらってしまった啓斗少年は、今度この甘露煮で羊羹でも作って持っていこうと考えるのであった。

「……甘いもの好きって言ってたし」

あらゆる大望の最終目的は、幸福な家庭を築き上げることにある。

幸福な家庭はあらゆる事業と努力の目標である。

また、あらゆる欲求がこれに刺激されて実現される。

サミュエル・ジョンソン「カーネギー名言集」より

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3917u/

---

猫又良庵と少年主夫

2011年11月30日14時49分発行